

子どもたちの

放課後

のいま



東京都・東久留米市
かるがも花々会

下田大輔

【第10回】 理解者であり支援者の親たち

●かるがも誕生と3つの約束

かるがもは、1990年、障害乳幼児施設に通園していた3家族が「障がいのある子どもがいても働きたい」「子どもたちの豊かな生活を守りたい」と立ち上がり、翌年、『自主保育グループかるがも』を開所したところからはじまった。

かるがもでは、保護者と利用契約を結ぶときに、大きく3つの約束を取り交わす。

1. 活動の理念や目的を理解した上で入会を決めてもらう。
2. お迎えは原則、親が行う。
3. 後援会に入会し、保護者会や年間行事の活動から、法人運営に協力してもらうと共に、親睦を深める。

今の時代においてはかなり面倒な事業所の

●大変な事故とお母さんへのエール

今年の2月、かるがもで大きな事故があった。利用者が学生スタッフの指を噛んで切断もしくは後遺症の可能性のある全治6カ月の診断が下った。事故を検証し対策をねり保護者会を開くと、急な招集だったにもかかわらず、学齢期の親に加え青年部の親たちも大勢集まった。親の立場として、「怖い」という反応がまさききに出てくるのではないかと想像できた。

保護者から、次々と声があがった。

○お母さんの今のつらい思い、本人のつらい思いがよくわかる。○いろんな経験をしてほしい：うちも本当にいろいろある。○せつないと思う。○みんな協力して成長させてあげたい。○誰が悪いということはない。起こってしまったことにどうしていいこうかと考えることが大切。当事者だけでなく、こうやって集まれるのは心強い。○利用抑制作提案した。かるがもの理念として断られたが、ことの重大性を考え、体制を整え心をひとつにしないと利用は難しいと思う。かるがもを守る、スタッフを守る。自分も含めて他人事ではない。○男の子、女の子、思春期に違いはあると思うけど、その子の特性を知ることが一番大切。原因があるはず。何もなく噛むということはないと思う。周りと馴染めないという課題をなくしていくのがスタッフさんの支援だと思う。3歩進んで2歩下がりがながら成長していると思う。いっしょにがんばろう。

部類に入るだろう。だが私たちは、子どもの成長を中心にした活動や生活の広がりを、親と共に分かち合うことに重点を置いていく。家とは違う一面に成長や喜びを感じてほしいとも願っている。

●お迎えがらひいひい

小学2年生の時に入会した春馬。思い通りでないと、寝転んで気に入らない思いを表わす。人との関係も特定の人にしか心を開かず、慣れない人が近づくと、それだけでも顔を隠して貝のように固まってしまふのだ。しかし、なぜか2つ先輩の茂樹のお父さんには違った。お迎えに来ると走って駆け寄り「いってきまして（おかえりなさい）」とニコニコ顔で握手を求めた。春馬にとってかけがえの

かるがもにとっても背中を押された熱くなるエールだった。

●家族の不安に寄り添うお父さんの遭難

4年前のゴールデンウィーク最終日の5月6日、一本の電話が鳴った。「お父さんが山に行つて帰ってこないの」。かるがもの親からの電話だった。絵を描く仕事のお父さんは雲取山にスケッチをすると言つて出ていき、2日間連絡が取れないとのことだった。私は急いで自宅に行き、詳しい事情とこれからのことを相談した。かるがも青年部に通う広大さんは、重度の知的障がいと肢体不自由がある26歳の青年だ。「眠れない」と言うお母さんに「今夜はゆっくり眠ってね」と、その日から広大さんにかかるがもで預かることにした。

5月7日、本格的な捜索が開始された。春山とは言え、まだまだ残雪が50〜60cmある箇所もある。8日、雲取山関連のブログにお父さんと似た人を見つけ県警に情報提供。直接サイトへアクセスして連絡をとりあった。9日、警察から今日で捜索の打ち切りをする旨の連絡が入った。その知らせを聞きつけ、土曜、日曜のチラシ配りには大勢の親たちが協力してくれ、早朝から暗くなるまで奥多摩周辺を必死に動き回った。

眠れない日が続き、お母さんも弱気になりかけた12日の朝、「かえりませ」のメールが突然お母さんの携帯に届いた。電波の届かない山奥を一週間さまよい麓がみえたところで携帯が繋がったのだ。お母さんとお姉さんを車に乗せ奥多摩の病院へ向かうと、ベッド

ない大人には違くない。(どうしてなのか) 関係を深めるのに苦労していた私たちに、気づきを与えてくれるきっかけとなると思った。

●親から学ぶ

茂樹のお父さんは、わが子の仲間として「普通」に春馬を受け入れてくれた。特別なことは何もない。決まった挨拶と握手に笑顔。しかしその自然体でくり返し裏切らないことが、とても心地よく信頼を寄せる要因なのだと思った。自分を否定されない関係性のおかげで、人といっしょの心地よさを感じ、心を外へむけられるよう実践をつくつていった。25歳になった春馬は、どの支援者にも(はい)とニコニコ顔でタッチを求めようになり、(いってきまして！)(はい！たいたい)と握手するお父さんとの関係は、現在も途切れることなく続いている。



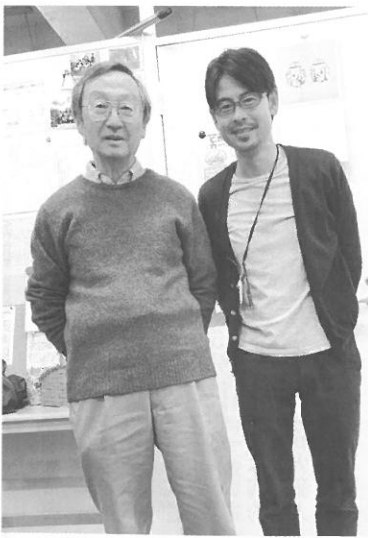
後援会行事／法人祭り

お迎えの様子
(中央：茂樹くんのお父さん)

に横たわるお父さんは、随分とやせ細り生傷だらけだった。かすれた声で「心配かけたね」と苦笑いするお父さんに「ほんとだよ」と返すと、お母さんの笑顔とみんなの笑い声があふれた。急いでかるがもに写真を送り状況を報告すると、大勢の歓喜の輪が広がった。親は誰しも自分の亡き後のことを考える。その後の子どもの生活は誰も肩代わりはできないから不安が募る。ただ今回、大きな不安を抱えていたお母さんが「ゆっくり眠ってね」の言葉が本心に嬉しかった。かるがものみんながいて本心に心強かった」とおっしゃった言葉がよく印象に残っている。

放課後の事業所は、子どもたちを預かる場であるが、地域のなかで親同士がつながっていくための拠点でもあると思う。子どもの年齢も障がいも学校もちがう親同士が、子育ての楽しさ、大変さを分かち合い、互いに助け励まし合える場。そして、長い時間をかけて関係を育む、子どもにとっても親にとっても大切なオアシスであり続けたい。

(しもだ だいすけ)



無事帰ってきてくれたお父さんと